様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：２０１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００１０２

研究課題名（和文）19世紀イギリスにおける教養と一般教育の思想

研究課題名（英文）Culture and General Education in Nineteenth-Century Britain

研究代表者
藤田　祐（Fujita, Yuh）

釧路公立大学・経済学部・准教授

研究者番号：９０７１０８３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：長い18世紀から現代にいたる転換期となった19世紀のイギリスでは、様々なコンテクストで教養と一般教育の思想が議論された。産業化、民主化、公教育の拡大が進む中で、精神の内面を涵養することを目指す教養教育が重視されるようになり、その理念として「教養」概念が形成されていく。また、国内に組み込まれたばかりのアイルランドを、特にカトリック住民を、連合王国における相互関係という観点から包摂する試みの一環として、新しい一般教育が目指された。世紀末にいたる時期には、科学技術の進展に伴って、科学教育を含めた教養教育の理念が主張され、帝国主義列強間の競争に資するという観点から科学技術教育が論じられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
初期近代から現代にいたる過渡期と捉えられる19世紀イギリスにおける教養と一般教育の思想を考察することは、教養の再考が迫られている現代の日本に対しても示唆を与えられる。特に、新しい公教育が制度化されていく過程でどのようなコンテクストで教養と一般教育の思想が議論されていたかを探究することは、公教育の見直しが進められて久しい現代の日本における教養と一般教育を考える上でも意義深い研究となる。また、19世紀イギリスにおける様々なコンテクストをふまえて、当時の教養と一般教育の思想に関する議論を分析する研究は、思想史研究の方法論にも貢献することが期待される。

研究成果の概要（英文）：In nineteenth-century Britain, in the transition period between the long eighteenth century and the contemporary period, thinkers argued about culture and general education in various contexts. In the process of industrialization and democratization, and in the spread of public education, liberal education, whose aim was to cultivate the mind internally, was getting more important with the idea of culture formed as its ideal. Also, a new kind of general education was envisioned, from the viewpoint of the mutual relationship between Ireland and Great Britain, in order to include that nation, especially its Catholic inhabitants, in the new United Kingdom. In the late nineteenth century, along with the progress of science, the idea of liberal education including scientific education was suggested, and the use of scientific and technical education was discussed in the context of intensified competition among great powers.

研究分野：近代イギリス思想史

キーワード：教養　一般教育　大学　アイルランド　ハクスリー　イギリス思想史　国民　政治思想

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

長い 18 世紀における名誉革命体制の下で展開した限定的な公共圏は、19 世紀前半における改革の時代を経て転換を迫られた。政治の民主化、自然科学の発展、公教育の整備が進む状況で、教養と一般教育がどのように議論され、公共圏の拡大と刷新とどのように相互作用したのかを解明するのが本研究の課題であった。また、現在の文教政策を考える上でも、何らかの示唆を得られることが期待された。19 世紀イギリスにおいて教養と一般教育の思想がどのように展開したのかを分野を横断して考察するために、以下の三点を明らかにすることを目指した。

## ２．研究の目的

(1) ヴィクトリア期の教養についての主なテクストの読解を通じて、当時の教養論の歴史的特質を明らかにすること

(2) 19 世紀アイルランドにおける教養と一般教育の思想を検討することで、19 世紀におけるブリテン＝アイルランド関係を、排除の理屈で捉えるだけではなく、双方向の包摂という観点から捉え直すこと。

(3) 当時の社会状況をふまえて、特に自然科学と科学教育という観点で展開された、教養と一般教育の思想をめぐる議論のコンテクストをたどること。

## ３．研究の方法

(1) ベン・ナイツ、ローレンス・クライン、木村俊道らの先行研究を手がかりに、17・18 世紀における文明社会についての議論を精査し、その諸相と比較しながらヴィクトリア期の教養についての主要なテクストを検討すること。

(2) 特にトマス・ワイズの活動と思想に焦点を合わせて 19 世紀前半のアイルランドにおける大学新設に関して展開された議論を当時の史料から再構成すること。

(3) 自然観を含めた世界観や帝国主義列強間の競争というコンテクストとどのように絡み合っていたのかという観点から、Ｔ・Ｈ・ハクスリーの科学論と教育論を分析すること。

## ４．研究成果

(1) 小田川は、上記(1)の目的を目指して上記(1)の方法で、マシュー・アーノルド、Ｊ・Ｓ・ミル、Ｊ・Ｈ・ニューマンといった当時の代表的な知識人が、17・18 世紀における文明社会についての議論を踏まえつつ、教養にどのような意味を付与し、それを用いてどのような主張を展開したのかを、同時代の政治状況を踏まえたテクスト読解を通じて考察した。商業社会に肯定的で、外面性を重視していたジョゼフ・アディスンらの「作法」から、経済活動と距離を置き、内面性を重視するアーノルドらの「教養」への移行について思想史的な見通しを示すべく、『崇高と美』において、アディソンらの「社交」的世界の「美」のヴィジョンを批判し、宗教的な「崇高」を突きつけたエドマンド・バークと、『教会と国家の構成原理』において、「教養」（文化）を物質主義的な「文明」と区別し、国教会聖職者に脱階級的な教養知識人（clerisy）としての役割を求めたサミュエル・テイラー・コールリッジに着目しつつ、文献渉猟を行なった。

(2) 崎山は、19 世紀のアイルランドにおける「国民統合」の問題を、教育という観点から掘り下げた。特に、19 世紀におけるブリテン＝アイルランド関係における双方向の包摂というプロセスの結節点として 19 世紀半ばにアイルランドに新設された大学に注目した。この大学の特徴は、ブリテンの近代化、とくに産業革命の進展と帝国の拡大という時代の要請に添った大学であったという点にある。またその立案・計画も、1820 年代以降に政治参加が可能となったアイルランドのカトリック系政治家、トマス・ワイズによるものであったことも重要であった。このような前提で、上記(2)の目的を目指して上記(2)の方法で、以下の点を明らかにした。

ブリテン連合王国の一地域に組み込まれたアイルランドでは、これまでのアングロ・アイリッシュ優位の社会からカトリックも含めた社会への変更が急務となっていた。その包摂のプロセスにおいて教育が重視された。この提案はカトリック解放によって政治参加が可能となったカトリック信徒であるワイズが主導した。ワイズは議会内部の委員会そして議会外の任意団体を通じて、初等教育の制度化ともにアイルランドの地方都市へ大学を新設する計画を推進した。ワイズは30年代から40年代にいくつかのパンフレットを発行しているが、その中では、初等教育から高等教育、専門教育に至る教育の体系化とより多くの階層に開かれ、より多くの人々が運営に関わる教育の重要性が主張された。またワイズによる提案はアイルランド在地の名望家層を巻き込んでいった。アイルランドの地方都市では、大学誘致に向けた請願活動が始まり、特にマンスター地方の主要都市コークでは多くの人々を巻き込んだ運動が展開されていった。このようにヴィクトリア時代初期のアイルランドにおいては、ブリテンの他の地域との対等性を目指す理念が共有され、その目標を達成するための方策として、教育、古典的な教養教育ではなく農学や工芸などを含む一般教育の充実が目指されていった。この流れは1840年代末にクィーンズ大学が開学することでより推進されていった。

(3) 藤田は、上記(3)の目的を目指して上記(3)の方法で、T・H・ハクスリーの教養と一般教育の思想を考察した。様々なかたちでヴィクトリア時代における新しい教育に関わったハクスリーは、教養教育を重視する一方で古典教育偏重ではなく科学の素養も身に付けられる教育を推進した。ハクスリーの活動と思想を考える上での社会的な文脈としては、科学の専門化と専門職化、科学研究とキリスト教会の分離、教育と科学研究に対する国家の役割などがある。ハクスリーの科学論と教育論がどのような文脈で展開されたのかを明らかにした上で、ハクスリーの科学論において〈自然〉がどのように捉えられていたかを思想史の文脈で明らかにし、「自然の知識」を教える科学教育を推進したハクスリーの教育論を考察した。

ハクスリーは、自ら命名した不可知論に基づいて自然現象を経験的に説明する知識を探究することに科学研究を限定し、科学研究から宗教の領域である〈超自然〉を排除して自然現象を自然の原因のみで説明する科学的自然主義を唱道した。一方で、成人教育機関で講演された教養教育論では、チェスの比喩で自然を擬人化し、チェスの対戦を通じてチェスのルール＝自然法則を教える存在として描いている。このような自然の教育を補完する人為の教育として教養教育が捉えられている。また、ハクスリーは、社会現象も自然法則に基づくと考えて社会を理解する上でも自然の知識が不可欠だと主張した。一方で、ハクスリーの技術教育論を観ることで、晩年にかけてハクスリーの教育に対する議論の強調点が変化していると言える。技術教育よりもまずは科学教育が必要と主張していたハクスリーは、1880 年代終わりになると、産業振興につながる技術教育の必要性を主張し、その目的としてマルサスの人口圧に根ざした諸国間の競争に生き残るためと主張するようになる。同時に、自然の非道徳性、自然の原理と社会の原理との差異を強調し、自然の教育を補完する人為の教育という教養教育の前提を掘り崩すような議論を展開していくのである。

(4) 上記の研究成果を最終年度である2020年度に学会セッションで報告した。2020年10月にオンラインで開催された第45回社会思想史学会大会で「19世紀イギリスにおける教養と一般教育の思想」というセッションを企画し、崎山が「近代的大学の誕生とリベラル・アーツ　19 世紀中葉のアイルランドの新設大学を題材に」という研究報告を、藤田が「T・H・ハクスリーの教養教育論」という研究報告を行った。さらに、2021 年 3 月にオンラインで開催された日本イギリス哲学会第 45 回研究大会で「ヴィクトリア期における教養と一般教育の思想」というセッションを企画し、小田川が「作法から教養へ」という研究報告を、崎山が「国民教育と地方大学トマス・ワイズのアイルランド教育改革論」を、藤田が「T・H・ハクスリーの科学論と教育論」という研究報告を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>崎山直樹 | ４．巻<br>849 |
| ２．論文標題<br>英国のEU離脱と北アイルランド | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>歴史評論 | ６．最初と最後の頁<br>74-84 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.11501/7940618 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>藤田祐 | ４．巻<br>32 |
| ２．論文標題<br>Ｔ・Ｈ・ハクスリーの宗教信仰――どこに見いだすべきか | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>人文・自然科学研究（釧路公立大学紀要） | ６．最初と最後の頁<br>37-51 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>崎山直樹 |
| ２．発表標題<br>近代的大学の誕生とリベラル・アーツ　19世紀中葉のアイルランド新設大学を題材に |
| ３．学会等名<br>第45回社会思想史学会大会セッション『19世紀イギリスにおける教養と一般教育の思想』 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>藤田祐 |
| ２．発表標題<br>Ｔ・Ｈ・ハクスリーの教養教育論 |
| ３．学会等名<br>第45回社会思想史学会大会セッション『19世紀イギリスにおける教養と一般教育の思想』 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>崎山直樹 |
| ２．発表標題<br>責任主体なき大学改革を変えるためには？ |
| ３．学会等名<br>コンソーシアム京都『若手研究者からみた「大学改革」　アフターコロナの時代を見据えて』 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>小田川大典 |
| ２．発表標題<br>作法から教養へ |
| ３．学会等名<br>日本イギリス哲学会第45回研究大会セッション『ヴィクトリア期における教養と一般教育の思想』 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>崎山直樹 |
| ２．発表標題<br>国民教育と地方大学　トマス・ワイズのアイルランド教育改革論 |
| ３．学会等名<br>日本イギリス哲学会第45回研究大会セッション『ヴィクトリア期における教養と一般教育の思想』 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>藤田祐 |
| ２．発表標題<br>Ｔ・Ｈ・ハクスリーと科学論と教育論 |
| ３．学会等名<br>日本イギリス哲学会第45回研究大会セッション『ヴィクトリア期における教養と一般教育の思想』 |
| ４．発表年<br>2021年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 崎山　直樹<br>(Sakiyama Naoki)<br>(10513088) | 千葉大学・国際教養学部・准教授<br>(12501) | |
| 研究分担者 | 小田川　大典<br>(Odagawa Daisuke)<br>(60284056) | 岡山大学・社会文化科学研究科・教授<br>(15301) | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|